

別冊

おいしだものがたり

～資料館資料編～

■『栗の花咲く最上川』

「小松均が描く大石田 春一初夏」展より

ただ今資料館で開催中の「小松均が描く大石田 春一初夏」展から、『栗の花咲く最上川』を取り上げます。とはいえ、その迫力やスケール感、綿密な墨線は実際にご覧になっていただくとして、今回は小松均やその画業といった周辺のご紹介です。



『栗の花咲く最上川・上』

小松均（明治35・1902—平成元・1990）は、亀井田村深堀（現大石田町大字豊田）に生まれましたが、1歳で父と死別し、白鳥村（現村山市白鳥）の母の生家に身を寄せ、同地で青少年期を過ごしています。その後18歳で上京し、新聞配達や勧誘をしながら川端画学校にて日本画を学びました。卒業後は、日本画のみならず油彩やデッサンの研究を行いつつ、各種公募展に出品しています。京都市左京区大原に移り住んだ20代半ば頃から画業が確立し、没するまで大原を拠点に活動しました。

『栗の花咲く最上川』含む最上川シリーズは、昭和43年に山形美術博物館で開催された小松均画業展に合わせて故郷の白鳥に滞在したことが契機となりました。その翌年にも来県し、二度の滞在中長井から酒田まで最上川を巡りながら、まずは三難所を、次いで源流付近の長井の最上川を描いています。さらに昭和46年初頭には、「ことしは大石田を中心にした最上川に主力を注ぐ」と、板垣家子夫らの案内で聴禽書屋や町内の最上川を訪れており、この来訪で最初に描かれたのは、今宿から見た最上川です。この時下絵がほぼ出来上がり福祉会館で披露会が開催されたものの、一部の表現に納得いかず、『雪の最上川』として完成をみるのは昭和54年を待つこととなります。同年6月には再び来町し、大浦地内から見た最上川を手掛けました。これがこの年の院展に出品された『栗の花咲く最上川（上・中・下）』です。

昭和44年の『最上川（三ヶ瀬、鍋巻、はやぶさ）』は、渦を巻き飛沫をあげる川と崖状の対岸といった比較的近景にスポットが当てられ、昭和45年の『最上川源流（源流、長井付近その一、長井付近その二）』や昭和54年（昭和46年下絵制作）の『雪の最上川』では川に近い視点から対岸を見遣り、遠景の山々を仰ぎ見るように描かれています。これらの作品に比べ『栗の花咲く最上川』ではずっと視点が高く、俯瞰するように描かれています。特に小坂から描かれた『上』ではこの視点の高さが顕著です。それにより近景として下方に広がる大浦の棚田、画面を上下に分断するように左右に流れる最上川、中景の駒籠とその奥には鷹巣、そして実際より大きく描かれるためこちら側に迫ってくるような遠景の山々という、ダイナミックに展開される景物の連続性が見どころの一つといえるでしょう。

大石田も初夏を迎えました。小松均が描いた同じ季節の大石田を、是非味わっていただきたいと思います。

「小松均が描く大石田 春一初夏」展は6月20日（日）まで



大石田町公式アカウント開設

LINEはじめました



防災情報などを
受け取ることができます。

友だち登録を
お願いします!

登録方法

右のQRコードを読み
取って友だちに追加
してください。



大石田町公式LINE

防災放送の内容を

電話で確認できます

防災放送が聞き取りにくい、放送内容を確認したい等のご意見をいただき、町では防災放送確認ダイヤルサービスを開始しました。

このダイヤルは定時（夕方6時のメロディ等）放送を含め、直近の放送から8時間以内の内容を順次聞くことができます。

確認ダイヤル：0237-48-8444

■総務課総務グループ TEL35-2111（内線218）

町の人口 令和3年5月1日現在

世帯数	2,307 戸	(+4)
総人口	6,631 人	(-17)
男	3,270 人	(-6)
女	3,361 人	(-11)

(4月中の異動)

出生	1 人	転入 19 人
死亡	9 人	転出 30 人

※この数字は外国人数も含めた数字です。